

5 1 . 1 . 8

国際情勢研究会

## 中国の政治情勢の現状と その将来に関する問題点

まず今年の動きをひとわり追ってみると、1月に全国人民代表大会が開かれた。全人代とは何であったかを一口で言えば、十全大会以後の中国内政に含まれていたさまざまな問題が妥協的に凍結された政治的儀式だと考えてよいのではないが。問題は決してスッキリしなかった。しかし、批林批孔運動が吹き荒れていたにもかかわらず何故そのような形にまとまったのかというと、今日の中国の指導者達が毛・周以後の中国への移行期にあるということを今日の状況においてひしひしと感じているからにほかならない。一つの大きな歴史的時期が幕を閉じようとする臨場感の中に今日の中国の政治があるということを確認しておかなければいけない。それを「歴史的移行期における一つの政治的凝集力」と私は呼んだが、この凝集力はそれ程までに将来の中国に対する不安・懸念があればこそ現時点においていくつかの問題をこれ以上混乱、拡大することなく歴史的移行期をスムーズに乗り切っていかなければいけないという暗黙の了解に支えられているような

気がする。それが全人代の妥協をもたらしたわけであり、一口に言う  
と憲法においては文革的な路線が十分に取り入れられながらも、國務  
院の人事面においては行政官僚が依然として大きな壁を作っていたと  
いうことに現われていた。

一昨年(1970)の10月に毛沢東が重要な指示(中共中央第26号文件)、  
「プロレタリア大革命からすでに8年が経過した。現在は安定するこ  
とが良い。全党全軍の団結を強めなければいけない。」という最高指  
示を出した。すでに文革から8年たち、その後林彪事件が起き、十全  
大会以後は反潮流の運動に乗って批林批孔運動が湧き上がったが、現  
在はすでに安定することが大事だという安定団結の方向が出された。  
こういう基本的な路線の上で中国の政治の性格が形作られたというこ  
とである。従って問題は根本的には解決していないが、かつての文化  
大革命のような流動的な情況が激発することを押さえようとする暗黙  
の了解が働いているような気がする。

このことは裏側から考えてみると、例えば批林批孔運動、水滸伝批  
判、教育革命論争というようなイデオロギー闘争(キャンペーン)が  
起こるが、そのことが、暗黙の前提の壁を突き抜けて非常に大きな激  
動をもたらすという大衆的エネルギーが今日の中国の政治社会にはな  
くなくなっている。もう二度とご免だという雰囲気一般民衆の間にも漲  
っているような気がする。私自身8年振りに訪中して感じたことは、

我々が「人民日報」や「紅旗」を通じて感じている中国の政治のイメージと、北京に身を置いて感じるイメージとの間には大きなギャップがある。批林批孔運動、水滸伝批判が吹き荒れているという大見出しの「人民日報」や「紅旗」を見ていると、大変だという気がするが、実際には脱政治的な社会的雰囲気がかき曇っている。批林批孔運動も終息し、これからもいろいろな形の運動が起きると思うが、いずれもやがて尻切れトンボになっていくというサイクルを繰り返しながら歴史的移行期を経過していくのではないか。

その後の事態を追ってみると、全人代がそのような性格であっただけに、3月始めに姚文元の論文「林彪反党集団の社会的基礎について」が出、4月1日には張春橋の「ブルジョア階級に対する全面的独裁について」という論文が出、現在の中国の経済制度、特に所有制、賃金制の問題等についていくつか問題があるということが言われた。姚文元論文と張春橋論文との間には明らかにトーンの違いが見られ、姚文元はラジカルな立場から、張春橋はリアリストの立場から問題を突きつけているように感じられた。しかしながら依然として内部に問題があり、やはり大きな隊列に従って引続き前進しなければいけないということを張春橋は呼びかけている。こういう事態は依然としてあるような気がする。

6月頃になると、毛沢東が前年の秋に言っていた安定団結というス

ローガンが一つのキャンペーンとして強調され始め、いくつかの論文が出た。しかし、安定団結の強調は7月には反潮流運動にさしかかっていく。潮流というのは団結し安定し、いろいろな問題を凍結して前進しようというのであるが、それに対してそれでは駄目だという反潮流運動が起こる。批林批孔運動は正にそれだった。その流れの中に生じたのが杭州事件であった。杭州事件は今後の中国社会を予測する上で重要な意味を持っているような気がする。林彪事件のような権力闘争の上層部において生じた事件よりも、社会の内部から発生した事件であると思われるだけにいくつかの問題を指摘することができる。

1つは今日の中国の建前社会の矛盾というか、毛沢東思想を掲げ、文革から今日に至るまでいろいろなキャンペーンをやってきたが、結局はそういうものは建前であり、杭州事件前後にプロレタリア独裁理論学習のキャンペーンがあり、その中でもブルジョア意識、小生産意識を克服せよと言われながら、労働者してみれば賃金が増大して欲しいという当り前の要求から問題が起ったというところに深刻かつ重要な意味があるような気がする。ブルジョア派閥主義、ブルジョア法権、ブルジョア風が批判される中で、特に小生産意識が批判されたが、これは現在の中国では例えば自留地、家庭副業が許されるが、こういうことをやる時に集団経済を弱める方向、個人の利益を計る方向がどうしても出てくるということである。こういうことはいけないと言われ

ている矢先に杭州事件が起きた。杭州事件はいくつかの工場で労働者が賃金体系の不満等、いろいろな要求を掲げた。これに対しては軍を導入して上から押さえつけて一応8月中旬以後になると杭州事件は解決を見るが、ここで投げかけられた問題は決して本質的に解決されていない。同時に党中央への不信というか、毛沢東思想が強調されているながらそういうものをむしろ否定せんばかりの動きが出てきた。

今日の中国はかなり物が出回ってきている。農村はわからないが、例えば北京の市場を見ても香港の国貨会社と同じように物がある。物があればお金を出せば買えるわけであるから少しでもお金が欲しい。ところが平均賃金60～70元といわれるような低賃金に押さえられている。外国人の出入りの多い杭州で起こったことにも明らかのように、中国の社会が前進する中で起こってきているということで、この事件はかなり深刻なものがあつたような気がする。

その後起こつたのが水滸伝批判である。水滸伝批判を杭州事件との関連で見ると人もいるが、別の事件と見る方がよいのではないか。全体的には、権力闘争的な情況については政治的凝集力が働いて、移行期にあるという深刻な認識の下に内部的な角逐をできるだけ抑制しようという動きがあるが、杭州事件はそういうものの抑制がきかない場で起こつた。ところが水滸伝批判は文化大革命と同じように上からの指示、つまり毛沢東の指示で起つている。水滸伝批判は8月の下旬から

起ってきたが、香港で7月に毛沢東の新しい水滸伝解釈に則った本がすでに商務印書館で売られていた。「水滸新釈」といい、新しい毛沢東の指示に従って宋江を攻撃する立場から書かれた本である。9月初旬には「梁山と梁山英雄」という本が出ている。かなり前から準備されていないとこういうものは出ないわけで、その後の事態が明らかになっているように、毛沢東は水滸伝を批判しなければいけないという指示をかなり前から内部的には行っていた。

水滸伝批判というのは一口に言えば国内的には階級的投降主義者、対外的には民族的投降主義者を批判せよということである。これが水滸伝批判の核心であり、現代の宋江は誰かという状況が出てきたわけであるが、この運動もあまり盛り上がらない。批林批孔運動は林彪という、もう死んだ人物に対する批判であり、孔子批判もそれほどエネルギーを掻き立てるような題材には成りようがない。つまり敵がはっきりわからない。そしてまたこういう運動が起ったかという状況に一般大衆はなる。従って最後には瑣末主義、スコラ哲学的な論争になってくる。水滸伝批判も最近では仁侠の精神が批判されたりして非常に瑣末主義的なものになってきている。これでは知識人はよいが、今日の一般大衆、特に若い者は教育水準が低下しており、読み書きもなかなかできないというような中国の青年達がついていけるはずがない。新華書店を覗いてみてもあまりそういうものを買っている人はいない。

批林批孔運動が大衆的に行われているような場面を見ることができなかった。こういう状況の中で水滸伝批判もやがて不透明のまま終息していくのではないかと思う。

ただ、一体批判の矢面に立たされたのは誰かという問題は検討してみなければいけない。何故なら、水滸伝批判が出てきた時の「人民日報」の論文でも、現在の中国の社会の中に現代の宋江に等しい者がいるという現在形で事が語られているからである。単なる道徳的、哲学的な論争ではあり得ず、必ず背景には政治闘争がある。ただ、現在の不透明な状況の中で決定的に敵を明らかにしていくことができるような状況にはない、ということではないかと思う。

そういう状況の後でもう一つ起ったのが教育論争であった。教育論争は9月初旬、中国の新学期に、学生選抜の方法を討議する過程で清華大学に生じたと言われている。具体的には劉氷・清華大学革命委員会副主任が毛沢東に手紙を書き、「学生は労働に追われていて、まともに勉強できない。学力は低下するばかりである。教授はやることがないのでスポーツに精を出したり、買い物や散歩に出ている。」と言い、総じて現在の中国の特に理工系の学力水準の低下を嘆き、「1月の全国人民代表大会以来強調された中国の工業化の展望にこれで答えられるかどうか。」という疑問を投げかけた。

教育の現状を憂慮した劉氷を支持するような談話を周榮鑫教育大臣

があちこちで語ったそうである。周教育相は「文革前の教育でも良い点はあった。現在の制度がすべて良いのではない。」と言い、暗に劉氷を支援した。これは修正主義に再び導くものだという形で清華大学で批判された。毛沢東は来た手紙を劉氷に返さずに、学生達に返して討議せよと言ったそうである。劉氷や周栄鑫の立場は智育第一主義であって、毛沢東の言う徳育、智育、体育という三つの立場からの教育ということのを忘れ、ブルジョア社会に導くものだという批判が起り、12月初旬の「紅旗」は北京大学・清華大学批判小組の合同の論文を掲載し、「人民日報」がそれをすぐ転載し、「教育革命の方向は改変を許さない」ということで一応結着をつけたようである。12月9日の「人民日報」は「修正主義と戦う大革命」という論文を出し、その後も続いて今日に至っている。「教育革命の方向は改変を許さない」というところに見られるように、現在の教育制度に対する批判がこれ程までに潜在しており、そういうものでよいのかという潮流がかなりあるということである。従って「許さない」という受動的な防衛的な立場からこの問題をとらえざるをえないというのが現状だと思う。

昨年一年間を農業を中心に見てみると、7月初旬に石家荘で中共中央農業專業工作會議が行なわれたし、9月には大寨農業會議が行われた。ここでは現在の中国の農業の中にいくつか問題があり、豊作だと言われているが必ずしも樂觀を許さない、ということが明らかになっ

ている。農業の近代化、特に機械化を推進しなければいけないということが強調されたし、食料問題がかなり重要になっていることを示唆している。

以上の経過を考えると、政治的には一種の凝集力が働いており、経済的には周恩来の全国人民代表大会報告にあったように経済体系を整備して1980年までに中国を近代的な工業体系の備わった国にするのだという富国強兵路線が大きく存在していることには変わりはない。そういう状況の中でいくつか小さな反動が出てジグザグしているが、昨年一年間の中国の内政の動きは小康を保っていた。その中で杭州事件のように今後の中国を占ういくつかの重要な問題も同時に出されている。

これらの動きを補足するものとして考えておかなければならない大きな問題は、一連の旧幹部の復権である。文革時に失脚した軍幹部は85%位復活しているといわれる。林彪にやられた羅瑞卿、楊成武、譚政の復活、また、許滌新、薛暮橋などの学者が復活している。

以上のような前提の中でリーダーシップの問題を考えてみたいと思うが、この場合に現代の宋江は誰か、という問題に当てはめるのがよいのではないか。まず鄧小平であるが、鄧小平は復権後今日に至るまで非常に活躍しており、党、軍、政の3権を握ってしまっている。党官僚としても、軍との繋がりにおいても、対外的にも十分に活躍しうる

人物であり、最近では大寨農業会議でも報告するという状況であるし、フォード訪中その他対外関係からも鄧小平が批判に晒されているとは思われない。もしも鄧小平が批判の渦中にあるとすれば、これ程の活躍ができるとは考えられないし、訪仏してきているのだからそういう状況にはない。鄧小平はいつの間にかジワジワと党・軍・政を握ってしまった。73年4月に復権、同8月中央委員、74年4月中央政治局員、75年1月筆頭副総理、党副主席、最近は総政治部主任、総参謀長、中央軍事委員会副主席になった。それと同じ歩調で張春橋が大きな地位を占めてきている。ナンバー3の王洪文であるが、杭州事件の処理を誤ったとか、上海でいろいろな突き上げがあったとか、一時いくつかの折に出ていなかったということもあったが、最近の康生の葬儀を主催した王洪文の姿を見ていると現状の地位は保っていると考えてよい。王洪文も批判の渦中にあるとは思えない。少なくとも毛沢東が指導した水滸伝批判の現代の宋江の対象ではありえない。

すると現代の宋江はどうも周恩来を指していたとしかみれない。周恩来は文革の当初までは実権派とかなり近い立場にあった。その時点で一つの選択が行われて周恩来はギリギリのところ毛沢東に賭けることになった。従って劉少奇や鄧小平を裏切ったわけである。当時中国で周恩来の演説を目の当りにして非常に無理して毛主席へ忠誠を誓っている姿が印象的だった。これに対して劉少奇や鄧小平は撫然と

していた。

こういう周恩来は毛沢東の文革路線、政治第一主義をすべて肯定していたわけではない。毛沢東体制の中で非毛沢東化をできるだけ進めて、できるだけ毛沢東政治の中のマイナス面をなくしてゆく努力をしてきた。私の仮説によると、そういう状況の中で周恩来時代と言われるような大きなリーダーシップを発揮し、実際の政治を動かし、脱文革を指導してきた周恩来と、文革に軍が重宝されたために巨大な力を持ってきた林彪一味といわれる軍人達との間に大きな摩擦が起きたのが林彪事件であった。そのことと毛沢東の選択とが絡んだ一種の予防クーデター的なものが林彪事件であったと見る。従って、そこでは周恩来が非常に大きな力を発揮したわけであるが、それにもかかわらず周恩来の非毛沢東化への戦略からするとまだまだ仕事は残っていた。

「五七一工程紀要」という刺激的な林彪の罪状を連ねた文章を流した責任者が周恩来であった。この点は十全大会で周恩来がそのようなことを言っている。

他方、十全大会の周恩来政治報告と対称的に王洪文の党規約改正報告の方は頻りに反潮流を鼓吹していたことが印象的であり、林彪を讃えているかのようなトーンが感じられた程である。毛沢東は現代の孔孟の道を歩むものであるとか、マルクス・レーニン主義の衣を被った秦の始皇帝であるとか言われることは毛沢東にとっても決して本意の

ことではない。何もかかわらずあのような文章を流したというところに象徴的に現われているように、毛沢東をたてながら、中国社会の内部に毛沢東の絶対化をチェックするような潮流を導入していったのが周恩来であり、そういう周恩来の非毛沢東化戦略がやがて露顕したのではないかという気がする。それが批林批孔運動から現代の宋江批判に繋がり、それに周恩来の病気が加わって現在の周恩来の位置があるように思う。もし周恩来の戦略がもっとうまくいったならば、あるいは周恩来は、ミコヤンをさらにスケールを大きくしたような存在になりえたわけであるが、現時点で見ると周恩来戦略は挫折して、周囲の者が病人であることを顕示するようになり現在の周恩来は out of date になったことを対外的にも印象づけている。正に「水に落ちた犬は打つべし」という状況である。

周恩来の病気がこのまま高じて死んだ場合、中国の国内は特に混乱が起るといふようなことはないのではないかという気がする。勿論前提は、周恩来が批判の渦中にあると言いながら、明示的に周恩来を批判しつくすような潮流が中国に育っているということではなく、周恩来を批判するということは対外的にも国内的にも損失であるし、中国自身の prestige や image を傷つけることであるからそれはできないが、最高リーダーシップの中に含まれている一つの方向として私は述べているわけで、明示的な周恩来批判が起るといふことを即時に

意味しない。

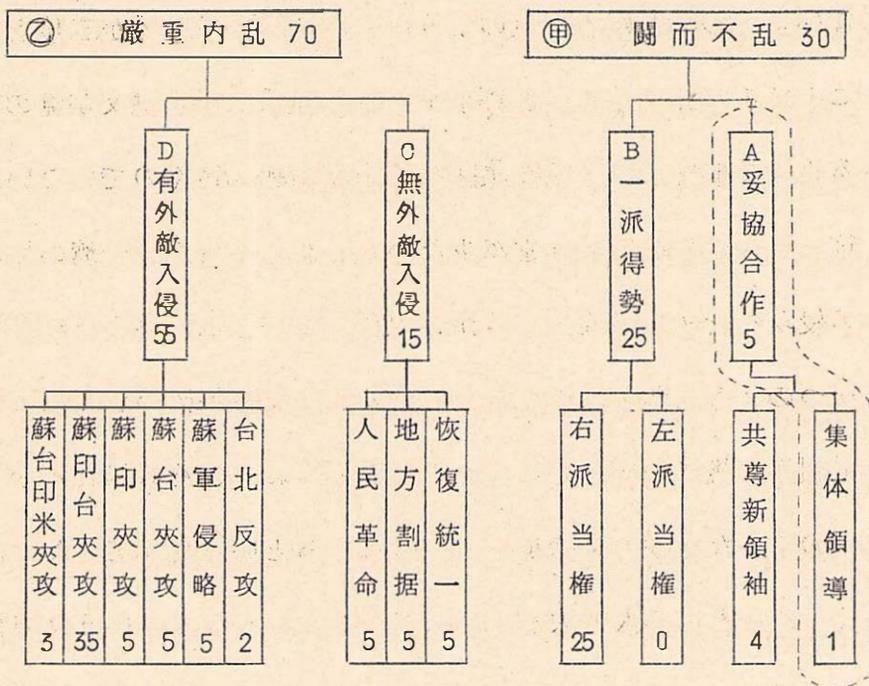
もし周恩来が死んだ場合には、鄧小平、張春橋、あるいはいろいろな難しい状況を coordinate する李先念が中心になっていくような気がする。その後には華国鋒、韋国清、紀登奎があり、ラジカルと言われた王洪文、江青、汪東興、陳錫聯、（華国鋒）がもう一つのグループを作りながら現状が維持されていくような気がする。次のランクでは蘇振華、倪志福というような指導者、そして現在のように旧幹部の復権が進んでくると羅瑞卿のような人達はそのキャリアからいっても大変な人材であり、今後の中国を取り巻く国際環境の中で羅瑞卿の戦略論が必要とされる状況が来るような気もする。譚震林、李井泉、陳雲の名前が最近出てきているが、これらの旧幹部がバック・アップをするような状況も生まれてくるような気がする。

逆に毛沢東が先に死んだ場合どうかということであるが、この場合は非常に予測が困難であるが、誰が後継者になるにせよ張春橋の方が王洪文より出て来るような気がする。いずれにしてもそういう人達のリーダー群が継承していくわけで、そこには妥協や内部闘争が繰り広げられながらある種の広い政治的な coalition を作っていくのではないか。いずれにしても誰が後継リーダーになろうと中国が工業化された国にならなければいけないという国家的、社会的要請がある。そのことは例えば現在の中国の賃金水準を上昇させるということもひと

えにこの問題にかかっているわけであるから、それは社会の内部から来る圧力だと言ってもよい。もう一つは中国の対外関係がそれにかかわってくるわけで、いずれにしてもそういう中国が存在し続ける限り、そう大きな混乱や激動はないのではないか。毛の死後、一部には文革派が勢いを得るとか、逆に文革派が急に勢力を失なうということが言われているが、そういうdrasticな変化はあまりないような気がする。

最後に、もっといろいろな可能性があるのだということを香港の「中華月報」（1975年9月号）に載った岳中石の「毛沢東死後の大陸発展は如何」という論文があり、この論者の見方は私の考え方と全く違うが、いくつかの可能性を示す意味で紹介したい。

毛氏去世 (数字は岳中石氏の予想した確率)



こういうことがありうるのかということを考えてみると、現在の情  
況では混乱はあるけれども中国自身の要請があるし、後継リーダーシ  
ップの中に鄧小平、張春橋を中心にかなりの指導者がいるので、団結  
する方向により多く力が働くのではないか。その場合にどの派が勢力  
を得るかという路線闘争が今日でも明らかであるが、左派が勢力を得  
るということとはありえない。というのは例えば文革のような教育をや  
っても必ずそれでは教育効果がないではないかという批判が出て来ざ  
るをえないような動きが出て来る。これは中国社会の一つの蓋然性と

して当然のことであり、そうなると必ずそれをチェックしようとする動きがあるはずであるから、結局はそういう潮流が妥協的にいくしかない。その場合に毛沢東のようなカリスマ的指導者が二度と出て来ることはありえないので、鄧小平なり張春橋なり王洪文が党の主席になるような形を取るにせよ集団指導的な体制にいくのではないかと思う。従って②の可能性は非常に少ない。特に岳中石氏は台湾の反攻やソ連の侵攻を含めて考えているが、現在の中国を取り巻く国際環境の中で一つの大きな問題は中ソ関係である。中ソ関係についてはモスクワは毛沢東以後の中国をいろいろな形で見えており、その場合にかつての王明のようなソ連派の指導者が中国にいるという状況ではない。そうになると、それらの人が大きなリーダーシップを持つというよりは、できるだけ毛沢東的な反ソ主義者でない人が出てくることに期待をかけるのではないか。鄧小平であればその可能性は非常に高い。鄧小平の対ソ観は毛沢東のように完全に社会帝国主義として一線を画すのではなく、国際統一戦線を支持したわけであるから、こういう立場からソ連と論争したが共に一つの歯止めは持っていた。

ソ連が攻めてくることは現在の国際社会を考えるとありえない。米国は新太平洋ドクトリンに示されているように米・日・中という trans-pacific coalition をアジア・太平洋地域に作りたい。大統領選挙後、誰がリーダーを握ろうとも、米国にとって最大の戦略

目標がソ連である限り、ヨーロッパを中心としては米・欧・ソという  
デタントの戦略を繰り広げながら、デタント戦略の優位性を確保する  
上でもアジア・太平洋地域においては日米関係を軸に米中関係を含む  
coalitionの衝動がある。中国の工業化への米国のサポートという  
ようなことを含めて考えると、今や国際社会はDの時代ではなくなっ  
ているような気がする。従って毛沢東亡き後の中国は、国際的には中  
国を取り巻く国際環境はかなり融和するのではないかという見通し  
の方が強い。中ソ対立の解消ということまで考えてよいかどうかはとも  
かく、現在のような中ソ関係が改善されるという可能性も含んだ国際  
環境になる方が強いのではないか。従って私は70～80%が……  
線の可能性ではないかと考える。

( 中 嶋 嶺 雄 )

（原稿）

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字列が続く）

（原稿）

## 質 疑 応 答

(石川) この表であるが、中嶋氏の意見に大体賛成で70%内乱という方は考えにくい。ただ、甲の「闘争はあるが乱れない」という中で妥協合作と一派得勢をどのように論者は区分して考えているのかわからないが、妥協合作の中で極左派が劣勢になるという形ならそうではないかと思う。つまり、分け方がおかしいので、集団指導的な形を取りながらも現実的には極左派の人達の力が限界を持つという行き方になるのではないか。A、Bという分け方ではなく、A、Bが一つになって妥協合作の中での力のバランスを考えてみるとオーソドックスなりアリスティックな力が大きく、極左派の力が小さいという形の妥協合作ではないかと思う。

(大来) 杭州事件との関係はどうか。

(中嶋) 杭州事件の解決は今の中国を本格的に take off させることにより全体の生活水準を上げ、国民所得のレベルを上げ、賃金体系を上げるということ以外にない。現在かなり消費物資が出回ってきている。私はモスクワと北京を同時期に訪れたがソ連と比べて品質はともかく、日常の消費物資の量はむしろ中国の方があるのではないか。にもかかわらず毛沢東思想による indoctrination が強過ぎるために、賃金を上げるということ自身が社会的な悪であるような状況の中

に閉じ込められているので、このことに対するフラストレーションではないかという気がする。その意味でもこういう事件を解決するためには現在の中国がこれ以上イデオロギー的なオリエンテーションの強い社会であるよりは、できるだけ開かれた社会へ take off していくことしかないのではないか。そういう圧力がむしろ強くなっていくのではないか。

(大来) 物資の出回りが豊かで賃金が押さえられるということになると、経済力のかなりの部分が消費以外に向けられているということか。

(中嶋) そうだと思う。ただ、経済の体質そのものがまだまだ脆弱であることには変わりはないわけであるから、そういうことを今後の中国が考えていかないと、今は毛沢東という要石があるためにいくつかの不満があっても押さえられているが、いろいろ出てくるような気がする。政治的な権力闘争的な混乱・内乱、政治・軍事的な混乱というよりも社会的な転換に伴ういくつかの問題の方のウエイトが今後は高くなるのではないか。

(佐伯) 権力闘争はそれほど深刻ではないが、社会的には混乱する要素があるということか。

(中嶋) そうであろう。

(石川) 社会的な混乱というのは今いわゆる文革派という人達がや

っているような行き方ではどうしても片付かないということは事実だろうと思う。

(中嶋) 杭州事件は社会的混乱だが、杭州事件はある意味では杭州という所だけに押しとどめられて解決されたようなものである。

杭州事件のようなものが全中国に広がり、それに地方の軍人が軍を動かして中央にたてつくというような意味の事態はないのではないか。

(佐伯) 毛沢東の死後、中ソの関係は少なくとも今よりは対立が緩和する方向へいくという話だったが、その場合に米中関係はどう見るのか。中国がソ連とも米国とも大体うまくやっていく方向を辿るのか、より中国はソ連に接近して、米中関係が非常におかしな状態になっていくのか。

(中嶋) 現在の中ソ対立というのは極限状況ではないかという気がする。これ以上いくと戦争になる。そこまで進んでいるわけであるから潮が引いていくような形で、毛沢東亡き後の中国のリーダーシップの交代を一つのキッカケとして緩和していく可能性もあり得る。だからといって、かつての中ソ一枚岩のような状況が復活するとは思えない。従って中国は二元的な政策という意味で、米中関係と米ソ関係を天秤にかけられるような立場に到達するかもしれない。

ただ、その場合に今の中国の修正主義批判が止まるかという、  
そうは考えない。これはまだずっと続くのではないか。康生の葬  
儀の時に、反修戦士という形で葬儀をするということにも見られ  
る。中ソはすでに良い時代よりも悪い時代の方が長い歴史がある。

(佐伯) 実際の中ソ関係がどうなるかということよりは、恐らくソ  
連は毛沢東の死後に期待をかけて中国との関係を改善するための  
努力をするであろうし、米国はソ連がそういう動きをするという  
ことを考えて対抗措置を取るであろうから、中ソ対立が現実にと  
うなるかは別として、中ソ対立は今までより緩和されるという可  
能性を前提にして米国もソ連も動き出すということになると、中  
国とソ連と米国との関係は今よりも不安定なものになっていく可  
能性があるのではないか。その場合に台湾の問題はどの程度の比  
重を持ちうるのか。例えば米国が中国との関係を悪化させないた  
めに台湾の問題について大統領選後、比較的早い時期に手を打つ  
のではないか。そういう可能性をどう考えるか。

(中嶋) 大統領選挙後にはその可能性があるのではないか。

(石川) ベトナムがなければ、この間のフォード訪中時でも可能性  
はあったのだから、恐らく大統領選挙が終わればその可能性は出  
てくるだろう。ただ、台湾の安全の問題を米国は中国とどのよう  
に話し合うか、その点が問題だと思う。

(佐伯) 昨日、米国大使に聞いた時に、「台湾と中国の間に何らかのクッションを作らなければいけない。どういふクッションを作ればよいかを今考えている。ただ、ともかく曖昧な状態に米国は耐えられないであろう。従ってすぐではないが国交正常化を目的としてゆく。」と言っていた。

(中村) 鄧小平が国際統一戦線を支持しているということだが、その考え方はどういうことなのか。例えばソ連と中国が世界戦略の面では歩調を合わせて協力していく、経済から何から一枚岩にならなくても対外政策的に歩調を合わせていくという位の結びつきなのか。

(中嶋) 鄧小平が63年に中ソ会談の代表としてモスクワを訪れて決裂して帰ってきたわけであるが、あれほどホットな conflict がありながら、基本的な考え方は社会主義陣営内部の論争、対立だという見方が鄧小平にはあったと思う。それは同時に朝鮮労働党や北ベトナム、日本共産党等にもあったと思う。毛沢東の場合にはそうではなく、社会帝国主義は資本主義だという一線を画すという認識の違いがある。従って鄧小平が全面的にリーダーシップを取った場合には、そういうような性格からしてある程度もっと合理的な関係になる可能性はある。しかしながら、それもその当時の中国の国際環境に支配されるであろうし、現時点よりもっ

と国際政治における米・中・ソのバランスは複雑な情況を流れているので単純には言えないにせよ、少なくとも何らかの形でそういう情況が出てくるという気がする。ただ、これはあくまでも毛・周死後、鄧小平などがリーダーシップを発揮するという前提に立つわけであるから、その前提が崩れ、今後かなり長期にわたって毛沢東が健在であるとか、ソ連の方が先にブレジネフ体制が崩壊し、その後どういう人物が出てくるか等、いろいろ不可測要因がある。

(中村) 鄧小平の経歴だが、モスクワに行っていたのか。

(中嶋) フランスが主で、モスクワにはそんなに長くいたことはない。

(佐伯) 毛沢東が死ぬ時期をどう見るか。あまり物が言えないし書けないという噂があるがどうか。

(中嶋) 意外にああいう状況を続けながら持つのではないか。きちんとした発音ができず、しかも訛がひどいので湖南語を王海容が聞き取って北京語に直し、それを英語のできる唐聞生が外国の賓客に伝えるといわれている。口はそういうことであっても意識はかなりはっきりしているということもある。

(小倉) 杭州事件は最後は軍隊が出て完全に押さえたのか。あるいは若干でも労働者側の言い分が通ったのか。

(中嶋) 完全に押えたようだ。杭州事件はこの夏にピークになったのだが、その前からいろいろあり、一説には王洪文が北京から来て労働者を宥めようとしたが駄目であった。特に、王洪文は上海でも同じような事件が起って、上海では逆に突き上げられたということである。(これは台湾系の情報であるから確かかどうかはわからないが。)多少でも妥協を計るというような生やさしいやり方ではなかったと思う。

(小倉) 経済が発展していくにつれて、こういう事件がだんだんと起ってくる可能性がかなりあると思う。

(佐伯) 台湾と中国本土との関係は今どうなっているのか。多少のルートを通じてお互いが意志を疎通し始めるような可能性はあるのか。

(中嶋) いろいろ言われながら結局はないのではないかと思う。鄧小平も非公開談話のなかで、ないときっぱりいっている。台湾は台湾でいく以外にないのではないか。

(太来) 台湾の雑誌「台湾政論」が発禁になった。

(中嶋) かなり手厳しい論調が出ていた。私のところに5号までそろっている。5号まで出たところで発禁になったが、その論調からしてもこれは大変な意味をもつのではないか。

(佐伯) 台湾の中に今いろいろな動きがあるらしい。蔣経国の行き

方に対して修正を求める動きがあるらしい。

(中嶋) そういうものを含んで、いままで台湾独立運動というのは反体制であり、亡命者の運動だったが、台湾独立という言葉は使わないにせよ何らかの形での国台合作つまり「台湾共和国」への道しか台湾の将来はないと思う。

中国を取り巻く国際環境の中で米中関係は今後かなり大きな絆を作っていく、そこに日本も入る。日本はそういう意味で新太平洋ドクトリンに示されるような外からの圧力で、好むと好まざるにかかわらず米・日・中という coalition の中に位置づけられていくような気がする。そうすると、米国の場合は非常に都合がよいと思うが、日本の場合はアジアの中のもう一つの日本が要になる三角形、ソ・中があるわけであるから、米国のソ連に対する角度と日本のソ連に対する角度と随分違う。米国より日本の場合の方がもっと対ソ関係については大きなハンディキャップを負わざるをえない。そういうことを考えると、今年の国際情勢をじっくり見つめて、世界の動きの中で日本の外交を考えていかなければいけない時期だと思う。日本の内政のスケジュールを見て外交を考えようというようなことでは困る。特に日中平和友好条約、覇権問題などはそういう点で本当に日本の主体的な判断がこれからますます要請されるのではないか。従ってこれまで述べてきた

ことは今日の時点で考え得る一つの蓋然性にしか過ぎず、巨大な不可測性を中国あるいは中ソ関係は残している。そういう測り知れない状況を残したまま日本の将来を予測するような決断をすべきでない。もしそうであれば76年の世界は year of indecision で、米・ソ・中もリーダーシップの交代期にあるので、日本もそれに習ってこの問題は不決断でいくことが国益のためには良いような気がする。

(佐伯) その場合には日本は覇権条項を適当に解決して中国との間の平和友好条約は締結する。同時にソ連との間は領土問題が片付かないので平和条約ではなく善隣友好条約を締結する。ただし、はっきりと領土問題を棚上げすることを明記するというように両方に橋を架けるといのも一つの方法だと思う。しかしそれでは結局領土問題が事実上棚上げになりそうだということではなかなかやれない。棚上げにするのではないということを何か明記できれば結局中国と同じ性格の条約をどうしてソ連と結んでいけないかという理由は何もない。それは中国が覇権に関する日本側の解釈を飲んだという場合である。そういう姿勢を取ればソ連はあの解釈にあまり文句を言わないであろう。

(石川) 中国が簡単に飲むかどうか。

(内田) 米・中・日の coalition のような形に動く可能性と中

・ソの対立が少し緩和するということは矛盾しているような感じを受けるが。

(中嶋) 中ソ対立の改善の可能性は将来的なことであり、米・中・日の coalition は現時点で日本に押し寄せている外圧である。そこに大きな時間的ラグがある。もしも中ソが改善されるような状況がかなりはっきり出て来ると恐らく米国のアジア政策そのものも大きく変わってくるのではないか。

現時点で私は中ソ対立についてはむしろ激化論者であり、中ソ対立は serious なもので、まだまだ東南アジア等を草刈場に今後拡大する方向を見ておかなければならない。ただそうかといって決定的にそのことを排除して我々が日本外交を考えてよいかという決してそうではない。

(佐伯) 差当りの東南アジアに対する中国の出方はどうか。

(中嶋) 中国はかなり防衛的にならざるをえない。特に中国にとってインドシナを失いつつあるということは、かつて60年代に民族解放闘争のシンボルとして中国がサポートしたキューバを完全に失なった以上に、地理的にも近くあれほど支援を約束していたインドシナが中国から離反しつつあるということは大きな喪失だと思う。カンボジアも含めてインドシナの3国はやがてそちらの方向へ行くような気がする。こういう状況がもたらす苛立ちの中で

中国が当面の東南アジア政策を確定していかなければいけないということになると、革命勢力に対する外交攻勢ではハノイと競合する面が非常に強くなる。A S E A N諸国との関係を見ると、中国との国交を樹立したマレーシア、タイ等において問題が結局解決していない故に、残るフィリピン、インドネシアは中国との国交のことはA S E A Nの外交的な浮上のために決定的な条件になると思わなくなり、むしろ新しい太平洋時代へ着眼し、オーストラリア、ニュージーランド、フィリピンも含む方向に目が向いているだけにそこの関係はあまり動かないのではないか。従って、76年中にシンガポールやインドネシアが中国と国交を樹立するかどうかも疑問なような気がする。その点でも中国は苛立たざるをえないので、少なくともアジアに関する限り、中国の政策はこのところ受身になっていく。そこへソ連の進出が目立っているので、その点でも中国は状況がかんばしくないのではないか。

(内田) 基本的には確かにソ連が随分やっているようだが、アジアにおける華僑等を考慮に入れると中共のポテンシャルな勢力は相当強いのではないか。表面的にはソ連はactiveにやっているが、最後のオチになるとなかなか中共の勢力は侮れないのではないか。

(佐伯) 中国は力はないが拠点を持っている。ソ連は力はあるが拠点は無い。

(内田) タイにソ連は相当投入してやっているらしいが、本当にタイを獲得できるかどうか疑問を持つ。タイを獲得できないようではとてもマレーシア、インドシナ、シンガポールにソ連は勢力を伸ばせないのではないか。

(中嶋) インドシナ3国は今後の国内建設を考えると当面ソ連に頼らざるをえないが、確かにポテンシャルには中国の影は色濃い。しかし逆に言うと、ここ5~10年を見た場合、中国とインドシナ3国、ベトナムとの昔からのかかわり合いがあり、いろいろな意味でソ連の方を選択せざるをえない状況がハノイにはあるような気がする。

(内田) 今は確かに反中国の空気の方が強いと思うが、経済建設の段階に入ってしまった時はやはりソ連だけでは駄目で、結局、日・米等の自由諸国の方に門戸を広げてくる段階が必ず来るのではないか。

(中嶋) ハノイもこれ以上ソ連の世話になりたくないという気持ちがあり、むしろコマーシャルベースで取引ができる日本等に対する期待が強いと思う。米国や日本に対して門戸を開きたいというのが本音であり、ただ当面は同時にソ連の経済援助を必要とするというのがアジアの現状であろう。

華僑の問題は、中国の影と現在の毛沢東政権の影とは陰影が違

い、中国の影が強いということが必ずしも毛沢東型中国ということではないし、その影が強過ぎるが故にアジアの側からの反発があることも感ぜざるをえない。ソ連は結局どこからも好かれていない。そうかといって中国がアジアに一番影響力を持っているかという国交樹立さえまだできない国がある。

(内田) タイは相当ずるい国であるからなかなか一つの方にはっきり片寄るといふ態度は取らないであろう。むしろ今のところは中共との関係にソ連を多少利用しようという位の腹があるかもしれない。ソ連が本当にいろいろな所で成功するであろうかということには疑問を持っている。

(佐伯) 鄧小平は毛沢東が周恩来の counter-balance として登用したということになるのか。

(中嶋) 周恩来と鄧小平の間には本来気まずいものがあるはずである。ところが鄧小平が復権したのは脱文革という潮流に乗って復権したと思う。しかしながら一度復権した鄧小平はそれでは周恩来に恩を感ずるかということ、かつて周恩来は鄧小平を見捨て自分だけ乗っていったわけであるから、そこが鄧小平らしい政治的な手腕に長けたところではないか。今の鄧小平はそういう意味では完全な毛沢東派でもないが毛沢東寄りで、むしろ周恩来に冷たい態度を取っているというところではないか。

(内田) 水滸伝の現代の宋江は具体的な人を指すよりは、むしろ毛沢東死後の投降主義に対する事前の予備的な工作というようには解せられないか。

(中嶋) 前提としてはその通りである。ただ、中国における政治闘争やイデオロギー闘争がそういうものであったためしがない。どこかに何かがあるのが今までの中国の政治路線闘争である。

(大来) 中国では人事問題について強い関心を持つ伝統があるのか。

(中嶋) 人事問題について非常に関心が強いが故に外国人に対してはそういうことはありえないという説明をするのであって、順位の序列が徹底的に重要視されることを考えただけでもわかる。

(石川) 鄧小平が辿ってきた考え方の傾向で眺めてみると、鄧小平には周恩来ほどの柔軟性があるかどうかは問題だが、考え方としては合理主義者、現実主義者の部類に入るのではないかという気がする。同時に過去の自分の歴史的経験から判断すると、今の時点における鄧小平はやはり文革派の人達に気を使わないわけにいかない。そういう意味では毛沢東との関係もできるだけ維持しなければならぬ。もし毛沢東が死んで、鄧小平、張春橋という形でリーダーシップが受け継がれてくれば、思い切った柔軟化はなかなか鄧小平はやれないかもしれないが、さりとて文革派のいうような形にもならないであろう。

(佐伯) 鄧小平は周恩来ほどのリーダーシップは発揮できないのではないか。

(中嶋) 周恩来も彼が完全にリーダーシップを発揮した時期は脱文革からニクソン訪中前後、十全大会までである。それまでは劉少奇であり、50年代は周恩来は外交的には確かに大きな存在であったが、政治的なリーダーであるというよりは国家の顔であった。鄧小平は周恩来に比べてすべての点でスケールが小さいのかもしれないが、それだけに水も漏らさぬような組織を作る能力を持ち得る人物ではないか。ある意味では党官僚であり、スターリン主義的なところを含む人物だけに手強い。

加えて喬冠華に注目すべきで、大変な人物だと思う。喬冠華を柔軟と考えるのは間違いで、鄧小平を対外的に補うような手ごわい人物として十分考えていかなければいけない。